第二部　国内開拓編

一、戦後国内開拓の歩み

引揚げから現地入植まで

終戦後一年有余、筆や言葉では語りつくせない悲惨な難民生活を経て故国に送還され、船中四十七日にわたるコレラの疑いによる防疫のたたかいを終えて、昭和二十一年九月九日佐世保港に、一行七十名は上陸した。

昭和二十年八月十四日、三江省樺川県大八洲開拓団を出発して以来、壮年男子の大部分は応召中で留守のため、老人、婦女子だけの数百里にわたる徒歩の避難行。千振から依蘭、更に方正を経て珠河に至り、海林に収容されるまで約一カ月、途中掠奪されたり、襲撃を受ける事も幾度かあった。宿るに家なく、食うに食なく、橋のない川を渡り、おりからの雨期の降雨にも雨露をしのぐすべもなく、びしょぬれのままあるいは満人の軒下に、あるいは高粱畑に野宿するような幾日かを繰り返し、ようやく海林、更に拉古に収容されて抑留の恥辱の生活を送った。

十月に入り解放されて南下するにも旅費はなく、右や左に食をこい、あの寒空の下を無蓋貨車で輸送され薄着の肌に霜を着たつらさ。長春での越冬難民生活の十カ月、そして引揚途中、船中でのコレラ退治の四十七日！、短くて長かった一カ年であった。

その間あるいは弾にたおれ、病に冒されて生命を断たれた同志は幾人だろうか？。九月九日ようやく上陸して懐かしい故国の土を踏んだ。うれしいのやら悲しいのやら全く感無量、まさに路頭に迷う小羊の群れでしかなかった。

そしてこれから再起への苦難の生活が始まった。

これよりさき、満洲長春での避難生活のおり、終戦後の内地の状況は皆目判らず、帰国後の方針も立たず、五里霧中の状態の中で、女子供も何とか逆境のうちにも希望をつないで喜んで帰りたい。帰したいとお互いに念じながら話し合った事があった。「われわれは今敗戦の現実の中で、国の保護をはなれて希望のない生活を送っているが、これから日本に送還されたらどうするか？。もう一度苦労しても開拓の道を歩むべきか？、それとも、もうこりごりしたので、百姓をやめて他の仕事を見つけるか？、内地の状況は皆目わからないが、いくら戦争に敗れてもみんなの希望する気持ちが強ければ、何とか道は開けると思う。よく相談して帰ってからの方針を立てようではないか」と。

そして皆で思い思いに話し合った結果、「いつ帰れるかわからないが、帰ったらどんなに苦労しても、もう一度開拓を志して、どこでもよい同志がみんなで力を合わせて働いて行きたい。敗戦国のみじめさは覚悟の上で、満洲の大八洲で果たせなかった夢を！、小さくともよい内地で築

きあげよう！。一人一人の力は弱くとも、弱い力を積み重ねればどんな事でも出来る。という事を満洲の開拓地で……、そして終戦後のどん底の避難生活の中で学んで来た…。団員や家族の六割が死ぬという、常識では考えられない。長い過去の日本の歴史のうちでも、日本人の経験した事のない、現実の体験を通して学んで来たその教訓を生かして、内地はどんな状態でも今更他に道を求めるよりも百姓で身をたてよう！。大八洲開拓団を再建しよう。」という結論がでた。

そして長春での共同経営で、最低の生活を維持しながら蓄えた金が、七月十七日に帰国のため長春を出発する当時に七万円あったので、半分はみんなの帰国準備に分配し、残りを帰国後の再建資金に当てる事にして公金として持ち帰った。

長春出発後、帰国旅行中の雑費に若干を費消して九月九日佐世保に上陸、更に小遣銭を分配、東京に出て上野の寛永寺に泊り、外務省、農林省にあいさつ。その後一応内原の日輪兵舎に起居して入植地を物色、十一月十日茨城県北相馬郡菅生村に入植するまでの帰農準備費用をまかない、菅生村に入植した時は文字通り全くの無一文になっていた。

長春でのそういう話し合いがあったので、胡盧島（ころとう）からの佐世保上陸までの四十七日にわたるコレラ防疫のあけくれに、上陸の見通しもつかないままに、帰還船Ｖ〇二十七号の船室を根城に、応召先から復員または早期引揚されて郷里に居られると思われる、高橋辰左衛門、石田時雄、滝口登美男、柏木正雄、今野今朝吉、高木樺五郎の諸君に連絡をとり、また内原の恩師野々山彦鎰先生に、手紙で上陸後集団帰農出来る方策等について御配慮をわずらわしたいとお願いして置いた。

船中から恩師野々山先生に送った手紙。

昨年八月十四日上司の命により現地を避難し途中受難の行軍を経て十月十四日長春に到着越冬せり。しかも情況必ずしも利あらず、方正・奉天・長春と三ケ所に分離越冬せる有様にて、その後方正部隊は南下合流せるも、奉天はついに今日に至るも合流出来ず柏木正雄君統率のもとに既に帰国せるものと認めらる。

避難当初の人員二〇一名、途中戦死、病死一一四名を出し、全員の半数以上を失えるは全く小生の不明のいたすところ誠に申訳なし。

七月十七日その筋の命により長春遣送第二十四大隊に編入され故国送還の途につき胡盧島より乗船七月二十八日舞鶴港に入港せり。検便の結果船内よりコレラ患者発見上陸を中止され佐世保に回航、目下佐世保港外にて防疫戦を展開、上陸許可を待ちつつあるも、上陸の見通しつかず陸上との連絡もなし。

ようやく開拓団関係の公用通信一部許可を得て発信お願い申上げる。

お願い申上げ度き事

一、生死を共にせる団員並に家族一同、今後における苦難も共に乗り切り度く集団帰農を希望し、その方策樹立に御指導相願度し。

二、差し当たり上陸直後の生活の根拠なし、先生のもとに何でもよい働いて食う根拠をつかみ度し。

三、上陸と同時に分散せず一応集団のまま働ける何事かをつかみ、働きながらおもむろに今後の方策を樹てたいが、内地の情況皆目解らず、先生に御誘導を御願し度い。

四、上陸期日は目下不明なるも、表記の所に御通知戴ければ幸甚なり。

五、団員中兵役にあり内地勤務の者や、満洲・中支より一足先に帰国せると思われる諸君もある筈、当方からも左記へ連絡して置く、もし諸君のうち先生をお尋ね御願するかも知れぬ、何分宜敷く御教導相煩し度し。

記

山形県東村山郡作谷沢村北作　　高橋　辰左衛門

福井県今立郡上池田村志津原　石田時雄
福島県若松市馬場町　柏木正雄
青森県南津軽郡常盤村　高木樺五郎
山形県北村山郡東郷村野川　滝口登美男
右委細上陸拝眉の上お願申し上げたし

八月九日　大八洲開拓団　佐藤孝治

野々山彦鎰先生

船中から高橋辰左衛門君に送った手紙。

昨年八月十日最後の応召にて小生等離団した直後、上司の命により残留団員婦女子全員避難の途につく。現在まで満一ヶ年、統率者の不明により半数以上の犠牲者を出し、小生生ける屍を恥じともせず故国の土を踏まんとして居る。誠に申訳なし。

残留者二〇一名、八月十四日高木樺五郎君引率の下に大八洲出発、依蘭・方正・珠河経由海林に収容され、更に拉古に移送、召集解除者と合流、十月四日ソ連軍に解放され牡丹江より乗車、ハルピン経由長春に入り越冬す。

その間一部は方正に残され、一部は奉天に南下す。方正に高木君あり、奉天に柏木君を派遣。小生長春にて皆と越冬す。三月十日方正部隊南下合流せるも、奉天部隊とは合流出来ず、連絡も密ならず情況不明、既に帰国せるものと認めらるる次第なり。

七月十七日小生等生存者七〇名、長春遣送第二十四大隊に編入され、長春出発南下胡盧島より乗船、七月二十八日舞鶴入港せり。検疫の結果船内にコレラ患者発見され上陸中止、八月一日佐世保に回航、目下佐世保港外にて防疫戦を展開中なり。上陸の見通しつかず、本日ようやく通信の許可を得て発信する。

一、貴殿中支より生還せるや否やも不明なり、無事帰還せりと思いこの書を認む。

二、妻女とき殿、御子息御令女、共に避難途中病死せり、小生の不行届の致すところ誠に申訳なし。

安部照子殿並びに静子殿、母子また同じ運命をたどる。

三、団の入営・応召・抑留者にして未帰還の者六十余名に及ぶ。

昨年八月十一日現在は七十五名なり。

四、避難中の死亡者百十四名に達し、現地出生の者にして生き残るもの三名に過ぎず、もって受難の行程を知るべし。

五、内地の山を目の前に見ながら内地の情況皆目わからず、上陸して果たしてこの生存婦女子をいかにせん。見当つかず、上陸して路頭に迷う事をおそる。

六、長春にて苦難の越冬生活を経て、目下案外落着き、生死を共にせる皆で上陸後出来れば集団帰農を希望しており、一刻も早く更生の道をたどり度く念願して居る。

七、当方から貴殿の外、既に内地に帰って居ると思われる石田、小滝口、今野、高木、柏木の諸君にも書信を送って置く。何分宜敷く上陸後の御誘導をお願いする。

八、山形県庁と、友部気付で野々山先生にもお願いをして置く。

出来れば上陸と同時に、集団のまま何事か飯の食える仕事にありつき、しかる後おもむろに帰農方途を講じ度いと思う。宜敷く頼む。

九、皆の健否も知り度し、表記の所に御一報願えれば幸なり。

一〇、御村出身宝石義開団長樋口庄三郎氏も、長春市に避難し居る事を出発間際に聞きたるも面接の機会を得ず、後送部隊にて帰国するはずなり。

右取り敢えず御一報かたがた御願いまで。

八月九日　佐藤孝治

高橋辰左衛門様

しばらくして柏木君から返事が来て、内原へ出て野々山先生にお会い

しようとしたが、野々山先生が御病気で重体のためお会い出来ず、江坂先生に会って、いろいろ上陸後の落ち着く先についてお願いした事、内原の義勇隊の日輪兵舎に入舎出来る可能性がある事、布団や毛布も借りられそうな事を伝え、上陸したら電報で連絡してくれ、上野まで迎えに出るとの事であった。

九月九日上陸と同時に電報連絡をし、上陸の諸手続きをすませて、九月十一日早朝佐世保を出発して東京へ向かった。列車の窓ガラスは破れほうだい、途中の駅で買い出し部隊が無遠慮に窓から乗り降りするすさまじさ。世のさまの移り変わりを痛切に感じながら、十二日夜半品川駅に着く。柏木、滝口両君が出迎えてくれて心強かった。

学生連盟の諸君に案内されて上野寛永寺に落ち着く。学生諸君が若いみそらで、夜遅くまでにこにこしながら世話してくれた親切さには、つかれ果てた姿でやっとたどりついた我我の心の底までしみとおるような、ほのぼのとした温かさを感じた。

明けて九月十三日、早速外務省を訪れて帰還のあいさつをしたら、浅川其二さんがおいでになり、「野々山先生に手紙を出したのは君たちだろう。野々山先生は病気で倒れて居るので、近藤安雄さんがその手紙を託されて外務省に届けて来ているが、すぐに集団帰農したい君たちの気持ちはわかるが、今すぐというわけには行かないので一応郷里に帰りなさい。」と言われた。

「ごもっともな事だが、私たちは郷里に身寄りもない移住者が多いので、さし当たりどこかに集団のまま落ち着いて働きながら入植地をさがして、なるべく早く集団のまま帰農したい。外に何のとりえもないので、是が非でももう一度開拓の鍬を振るいたい。」と無理にお願いした。「それでは一応内原にでも落ち着く事にしなさい」という事になった。次いで農林省を訪れたら、野田哲五郎さんにお目にかかった。出会いばなに、「やあよく帰った。君！これからどうするか？。」「ほかに何かするあてもなし、自信もないし、もう一度開拓の道を進みたい。生き残りの片割れ者同志が、これから生きて行く道は集団で帰農する道をたててもらうより外にない。今ここでばらばらに郷里に帰したら、結集する道も閉ざされてしまう。一応集団のまま落ち着いて、働きながら入植地を見つけたい。」

「君たちの気持ちはよくわかる。国でも緊急開拓の道を考えてはいるが、まだ受入れ態勢が充分出来ていないので、一応郷里の山形県に帰り、県庁でよく相談して入植地をさがして来なさい。君たちが満洲でやった事は僕もよく知っている。君たちがやる決心をしたのなら僕はどんな応援でもする。農林省ではまだ充分準備が出来ていないので、君が全国どこでもよい、ここに入植したいと思う土地を捜してきなさい。君たちがよいと思う土地なら、国有地でも民有地でもどこでも入植出来るように応援しよう。いま帰ったばかりで金もないだろう、旅費も何とかするから入植地を捜して来なさい。」と言って激励された。いつもながらの野田さんの温情には頭が下がった。

野田哲五郎氏

その後入植の事についてはもちろん、入植後も事あるごとに

野田さんにめんどうを見てもらった。東京に出て泊る所も金もなく、野田さんの仮住居にお世話になった事さえあった。どんな厄介な問題を持ち込んでもいやな顔一つなさらず心配してくれた。今でも当時を思い出し野田さんのありし日のお姿をほうふつする。

その後野田さんが外遊の途次、イタリアで交通事故のため客死された事は、かえすがえすも残念でならない。

そして翌十四日、河合さんに案内されて内原に向かい、夜日輪兵舎に到着、一応ここに落ち着いて再起の方策をおもむろに立てる事にした。

義勇隊訓練のために建てた丸いいわゆる日輪兵舎で、まん中の柱を中心にした傘型の建物で、中が丸い土間になっており、土間を中心にぐるっと回りに床がある。二階にもなっているので下から二階まで丸見えで話し合いも出来る、使いようによってはなかなか便利に出来ていた。

義勇隊の事務所だった所に開拓援護会支部の事務所があり、十五日に早速お伺いしてごあいさつやらお願いを申し上げた。

今井所長さんは元義勇隊訓練所長だった今井少将で、御親切にいろいろ温かい御指示や御注意を受けた。生活の援護の方策もたててくれた。そして私たちの今後の希望なども申し述べて置いた。「私たちは今後どうしても集団で帰農したい。ばらばらにしては片割れ者同志は立つ瀬がなくなる。入植地が山の上であろうと、水の上であろうと、寒い所でも暑い所でもよい。土地の条件をとやかくいわない、問題は集団でみんなが入植出来る所を見つけてほしい。」

江坂先生もおいでになり黙ってきいておられた。夜になって江坂先生宅を訪れた。うす暗くなりかかった家の前の畑で、江坂先生がまだ働いておられた。早速座敷に上り込んで先生の話をきいた。

「佐藤君！、君はさっき事務所で、寒い所でも山の上でも、

内原の日輪宿舎

開拓義勇隊訓練のため建てられた。
大八洲の引揚者が入植地が決定するまでお世話になった。

江坂弥太郎先生

水の上でもよいから入植地を捜してくれと言ったが、僕は君の言う事を皆までほんとうだとは思っていない。いままで寒い所で開拓して来たので、温かい方の開拓を考えたらどうか！、君たちは満洲で五族協和とかなんとか大きな事を言って開拓団で威張って来ただろうが、満洲の五族協和よりも、内地の同族協和の方がよっぽどむずかしいという事を心にとめて、これからの内地開拓を進めないと、とんでもない事になるぞ。単刀直入ズバリおっしゃられたのにはぎくりとした。

「よくわかりました。それでここにお世話になっても一日も遊んではおられないので、差し当たり働き口を見つけてほしい。近くの農家の手伝いにでも、明日からでも出られるようにして下さい。」「よかろう、早速近くの農家で働ける所を見つけようが、明日からというわけにはいかないので、まず宿舎の付近や道路の草刈りでもして居なさい」と言われ、さまざまな御注意を受けて先生宅を辞した。そして早速翌十六日から付近の草刈りや清掃などの作業を始めた。

野々山先生には船中から、御病気中とは知らず手紙で無理なお願いをしてあり、是非お会いしてお礼やらお見舞いを申し上げたいと数回お伺いしましたが、いつも御重体でお会い出来ず、私どもが菅生に入植する前後におなくなりになられた。亡くなるまでお会い出来なかった事は誠に申し訳なく残念でならない。

野々山彦鎰先生

身寄りもなくて帰る所がないから、集団のまますぐ入植地を捜したいと言って内原に住まわせてもらったが、必ずしも身寄りもなく帰る所もないわけではなかった。

帰国する前に皆と話し合った事があった。「僕も郷里には兄がおり、どうやら家を継いで百姓をやっているので、帰って頭を下げて当分食わせてもらうぐらいは出来るだろう。だが僕はのうのうと兄貴を頼ってなんとかしてもらいたいとは考えたくない。君たちも郷里の親兄弟や親戚などが首を長くして帰りを待っているだろう。今すぐ帰ったら、『死んだのではないかと心配して居たのによくぞ生きて帰って来てくれた。』と涙を流して喜んでくれるに違いない。だがほんとに喜んでくれるのはせいぜい三日間位だろう、四日目ごろからは『困ったものを引き受けた何としよう。うちでもやっと食うや食わずの生活のうえに、丸裸の引揚者の面倒まで見られるはずがない、これからどうして行くつもりか。』という事になりかねない。といってにわかにどうとも方法が立つわけではなし『何とかお願いします。』一点張りで泣いて頭を下げるよりほかあるまい。そういうところに家庭悲劇の種がまかれる。十中八九まではそういう道程をたどる懸念がある。そこでまず上陸したら家へ帰らないで集団のまま、どうせ食えない者同志だから、まとめて置いてくれる所を見つけ出し、食わせてもらいながら入植地を捜そう。我我の強いところは乞食をするにも共同でやれるというところにある。これをばらばらにしては何のとりえもありはしない。そこでもう一度開拓をやって行く決心をした以上、是が非でもまず集団入植できる所を見つける事だ。落ち着く先を見つけたら郷里へ一応帰る事にしよう。そういう風に落ち着く先を見つけてから根拠を持って家へ帰れば『そんな無理をせんでも家でも掘

立小屋位は建ててやるし田の二反や三反は分けてやるから近所で働いて居たらどうか。』ぐらいはお世辞にも言われるだろう。それをふり切って引揚者同志が寄り集まって、第二の開拓地を作るために働くところに家庭悲劇の種は消えて、逆にむしろ『よくもやるもんだ。』と親兄弟も心の底から喜んでくれるだろう。」という事で、上陸すると佐世保からまっすぐ東京に出て、外務省や農林省に帰還のあいさつをし、無理は承知の上で一応内原の日輪宿舎に住まわせてもらう事にした。そして入植地の見通しをつけてからそれぞれの郷里に帰してやった。

女子供にしてみれば、上陸早早飛んでも帰りたい気持ちだったであろうに、それを佐世保から東京へ、更に東京から内原へ、そして毎日さつま芋を食べながら草刈りや芋掘り作業！、女子供の気持ちがわからんではないが、だがしかし…、ここで一歩を誤ると取り返しがつかなくなる。涙を飲んで強行した僕の指示に、女子供といえどもぐち一つこぼさずに協力してくれたのには頭が下がる思いがする。

これさえあれば！、この気持ちさえあれば！、大八洲（おおやしま）は必ず再建できる。どんな逆境に立っても決してつぶれはしないと心強く思った。

昭和十八年満洲で現地応召、三ヵ年の戦地の生活から終戦後一足先に復員、思いは一つ満洲からの引揚げを予期して、郷里山形県で引揚げ後の集団生活、入植の方策等についていろいろ骨を折っておられた高橋辰左衛門君も、内原に居住の連絡を受けて早速内原へ駆けつけてくれた。

引揚げ途中妻子が全滅した君に会って申し上げる言葉もない。あれも言おうこれも言おうと思っていた事が、会って見ると言葉にならない。言わなくても判って居てくれるだろう…。むしろこれからどうするという事だけが話題になった。

その他早期引揚げや復員で帰っておられた諸君が続続と内原に駆けつけてくれて、見る見るうちに賑（にぎや）かになった。

内原の日輪宿舎のあけくれは、開拓援護会で食わせてもらいながらの、付近の農家への援農隊であった。援農隊といえば体裁はよいが、秋の取り入れ時だったので、芋ほりや稲刈りなどの手伝いをしながら農家で御馳走（ちそう）になり、帰りにさつま芋をもらって帰る毎日だった。子供らも喜んで内地の芋の味を充分味わった。

そして終戦以来の避難中の記録が検閲のため持ち帰るのが困難なのを予想して、何通にも複写してバラバラにして、少しずつ皆で手分けして持ち帰ったのを整理し、関係各機関、郷里の町村、団員の実家などへ、『大八洲開拓団避難状況報告書』として送る仕事から始まった。援護会事務所から謄写版をお借りして、反古紙をもらって裏返しにし、ガリ版刷りにした誠にお粗末なものではあったが、当時としては精一杯の仕事であった。

子供らも遊んでばかりはおられないので、援護会をわずらわして、九月二十日から鯉淵（こいぶち）村国民学校に入学させてもらった。そして腰を落ち着けて入植地の問題と取りくんだ。

江坂先生は毎日のように県庁や県農業会と折衝してくれた。僕と高橋君も先生に随行したり、単独で出かけて行ってはお願いしたり、真剣に取り組んだ。

江坂先生が親身になって心配してくれた結果、たまたま県農業会で緊急開拓事業として始められた菅生沼がよかろうという事になり、先生に

連れられて菅生沼の現地を見せてもらった。

利根川と鬼怒川の合流点に近い三角州で、一目で北満の湿地帯を連想するような見渡す限りの広い草原であった。満洲の大八洲の水田開発を思い出し、淡い郷愁に似た思いにかられた。よかろうという事で、全員、出来ればこれから帰還する団員も含めて、八十戸位集団入植できるようにお願いしたが、そうは簡単に問屋はおろさなかった。

前にも書いたように、大八洲の団員は大部分は現地応召のまま帰って居ない。老人婦女子も引揚げ途中あるいは銃弾に倒れ、あるいは栄養失調や疾病のため全体の六割を亡くした。応召したまま行先も生死もわからない団員は、いつ帰って来るという目安もたたない。大八洲を開拓によって再建するなどと言っても、一人一人をばらばらにしては、再建どころかその日その日の生活もおぼつかない事はわかりきっている。弱い者は弱い者同志で、いかにして力を合わせられるか、協同！、協同以外に何の方策もあり得ない。

女子供を主体にして集団で入植できる所を捜す以外に術はない。

入植地に条件はつけないが、集団帰農できる事が条件といえば条件だった。一カ所に少くとも八十戸入植できる場所、これがまたなかなか簡単な問題でない。

茨城県初代の開拓課長
竹田徳二氏

県の竹田開拓課長は、「大八洲という団体をまず解消して、一人一人で帰農するという考えに立ち帰って相談しよう」と言われる。

農業会の蓮田部長は、「八十戸も一緒に引き受けるという事は、受け入れる地元の関係もあってなかなか困難であるが、無理しても四十戸位なら引き受けよう。」と言われる。おっしゃる事はこっちでも良くわかるのだが、「おっしゃる通りにしましょう。」と言ってしまえばそれまでである。私たちにしてみれば半ば自殺に等しい。高橋君と話し合って思い切って広い北海道へ入植しようと決心してもみた。

そして高橋君と山形県庁へ行って相談する事にし、九月末山形県庁を訪れ開拓課で打ち合わせた結果、荒木事務官が茨城県や農林省へ出向いて局面打開にお骨折りを願う事にして、十月一日荒木事務官と一緒に内原へ帰った。

集団入植できる場所、八十戸から百戸位入れる場所というと内地ではなかなか困難だという事で、北海道へでもと藁をもつかむ思いで、十月九日農林省西ケ原農事試験場で開かれた、北海道入植についての打ち合わせの会議に出席した。山形県から開拓課の荒木事務官と、開拓者連盟の角張氏が出てくれたので、それに伴われて僕と高橋君で行ってみた。

荒木事務官も角張氏も最初から北海道へ行く事は賛成してくれない。「女子供を主体にして寒い北海道開拓は容易であるまい。いくら大八洲でも最初から八十戸も百戸も集団入植する条件では虫がよすぎる。わがままというものだ。四十戸でも三十戸でも入植できるという事は何よりではないか、茨城県で受け入れてもらえるならこんな有り難い事はないではないか。北海道へ入植する事になれば入植地には事欠かないが、一口に言ってなにしろ寒い。女子供を主体にして入植する事など及びもつかぬ。まず家族を残して単身入植し、準備を進めなければなるまい。君

たちは身勝手を言うにも程がある。」としかられた。

聞いて見れば一一ごもっともである。みんなで心配して下さるお気持ちは深く感謝する。だが何としてもこれから引き揚げて来る団員も一緒に受け入れられる根拠を作って置きたいという一心で、わがままは承知の上でねばって居た。そして内原に帰ってみんなで話し合い、十月十一日に江坂先生が心配してくれた菅生沼に入植する事に決し、これから引き揚げて来る諸君の事は、また別途に方策を立てる事にして、一切を江坂先生にお願いした。女子供に至るまでみんなでほっとした。ほんとうに嬉しさを隠せない気持ちだった。そしてそれぞれの郷里へ交替で喜んで帰って行った。胸をはって堂堂と里帰りした。

茨城県開拓課や県農業会との入植地決定に至るまでのいろいろな曲折はあったにしても、江坂先生が毎日のように親身になって心配して下さったので、それからはすらすらと事が運び、十一月十日先遣隊が菅生村に乗り込んだ。次いで毛布や布団や農具類、炊事道具、食器類まで援護会にお願いして、義勇隊で使っていたのを分けてもらい、数回に分けて本隊が入植した。

当時義勇隊の施設、物資はすべて進駐軍に接収されてその管理下にあったので、分けてもらうにもなかなか面倒な手続きが必要だったが、今井所長始め淵名先生や、神原先生のお骨折りのお陰で、生活に事かかない万端の準備を整えてもらったのは今でも忘れられない。

再建の第一歩を踏み出して

菅生に入っても、さて何から手をつけよう。まず村役場を尋ねて、大滝村長にあいさつやらお願いを申し上げ、当時農業会の開拓事務所長を兼ねておられた平間助役の指示を受けた。

差し当たり鈴木旅館に泊り、樽井の集会所でも借りる事にしたらよかろうと言われて、当時の樽井の常会長鈴木芳太郎さん(後の村長)を尋ねて、「菅生沼に入植する事になった満洲からの引揚開拓者で、差し当たり住む所がないので集会所をお借りしたい。」と申し入れた。鈴木さんは、「樽井部落の共有であるので、私一存では御返事いたしかねるが、よく部落の皆の意見をきいて二、三日中にはっきりして置きましょう。出来るだけ君たちの御期待に添うよう努力しよう。二、三日したらまたお出で下さい。」と言われ、宜敷くとお願いして鈴木さん宅を辞した。

数日後再度お伺いして重ねてお願いしてみると、「部落常会を開いて君たちの希望をはかって見たが、部落のみんながいろいろ心配して居る。『どこの者ともわからない流れ者に貸して、間違いでも起こされると取り返しがつかなくなる。』と言うので私は『あの連中は国策で満洲開拓のために働いて居た連中で決してそんな間違いはないと思う。もしあの連中が物盗りやその他の間違いを

入植当時樽井常会長だった
後の菅生村長鈴木芳太郎氏